

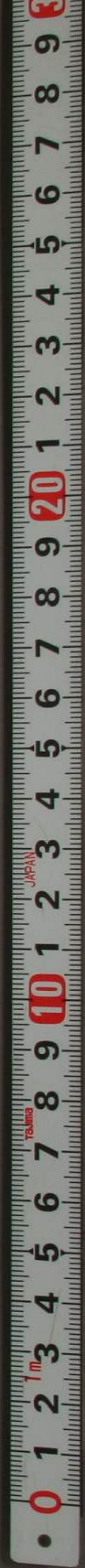
續裝束圖抄

和装本

ワ 3

1478

2



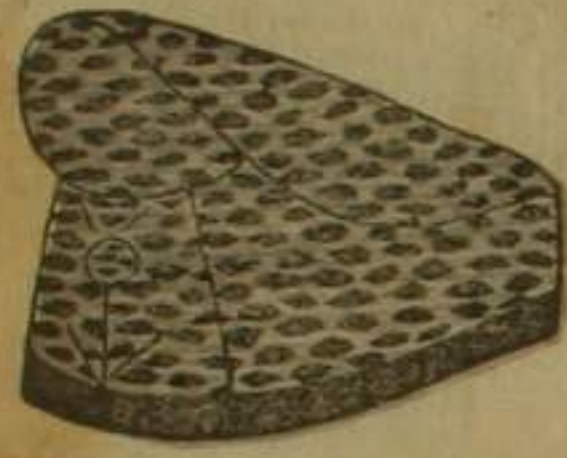
續裝束圖抄

邊
1478
2止



續裝束圖抄

風折烏帽子



末廣

蝙蝠



左折 又左上りも云左眉へ右折は折
あそ用たり不折はへぬり格志は老若
子細きしりも尚耐を沙汰る
古代ハ大キあるを用今世ハ小取の
小志を用ひ
惣諸紙拾侍浪以上紫を用由

金銀紫白地白骨黒骨子細か
繪様定か

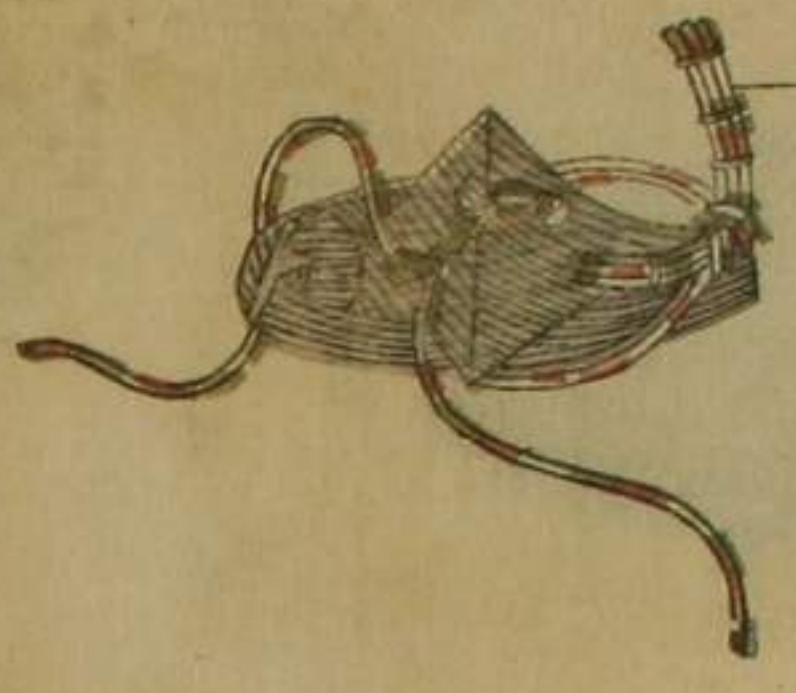
武家方は古來白骨を忌と云事あり
白骨白かゝる黒骨忌なり浅黄黄尾
等の地紙ありへ妻江ハ侍従以上
又侍浪侍任の家ありて不折也云



折烏帽子 折入工仕云



同 長小結
小結ハヒシヲ余シタス



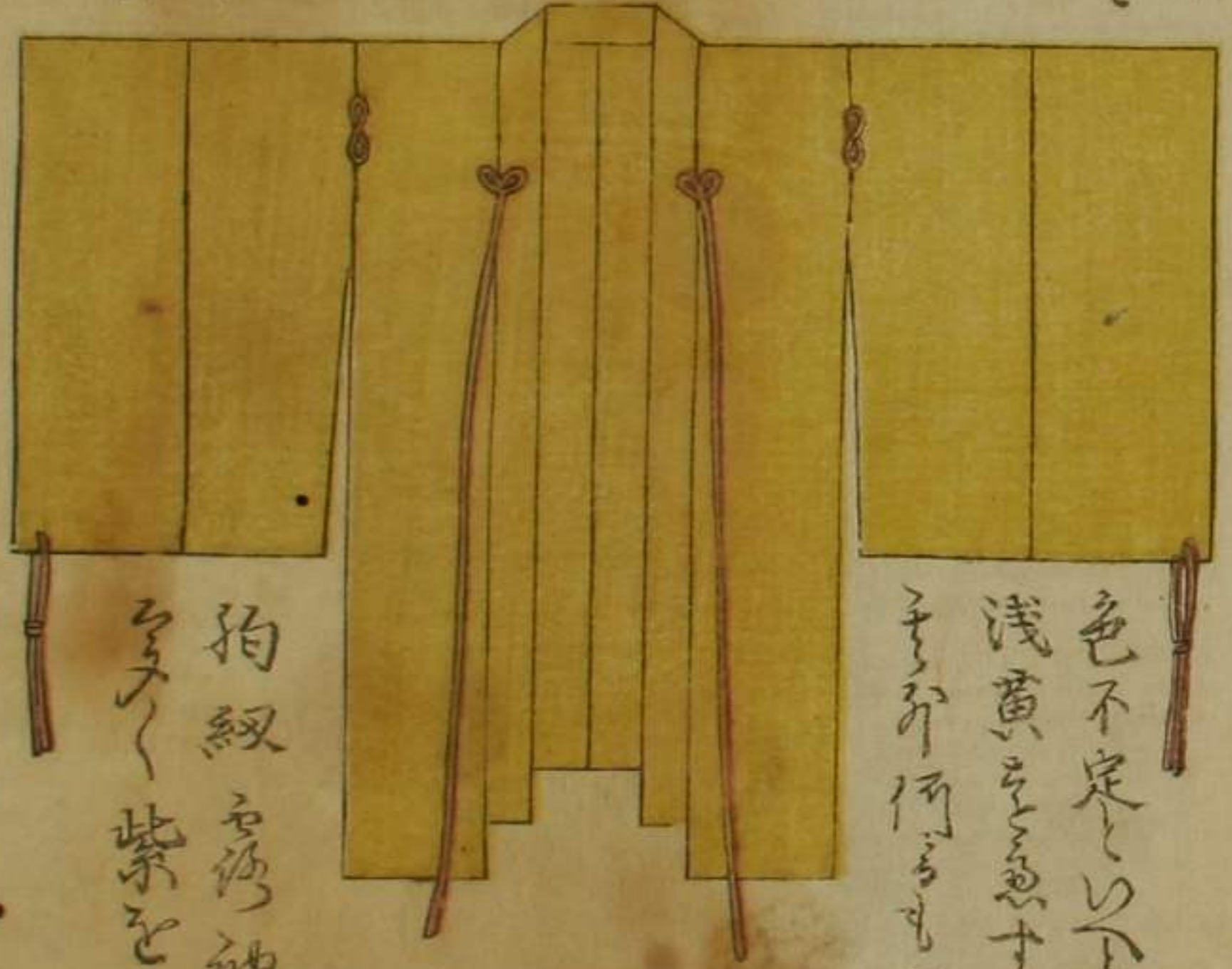
侍烏帽子の小形折家々の習ふて
いんとも尚付用ハ多ク一様ありた向く
家の方を用ふもあり普通ハ祝世折乃
よ〜ん
懸緒一寸まだ一豹文等の平紐を用ふ
事ありとも當世々ハ餅前黄赤の丸紐を
用ふ

童秋小素襖を著したる時是をりちめ
小結ハ赤白餅の三色之是をいせりんの
小ゆし〜云掛依りあり

直垂

地精好色定〜
又寸き精好〜
紗地を引〜
む相摸〜

袖をい〜
肉を西〜
多れ〜
袖を〜
夜更のよ〜
如〜
着用〜
あ〜
せ〜



色不定〜
浅黄〜
そ〜

拍紐〜
紫〜

福井會津津島
洋風
地
用

同下之圖

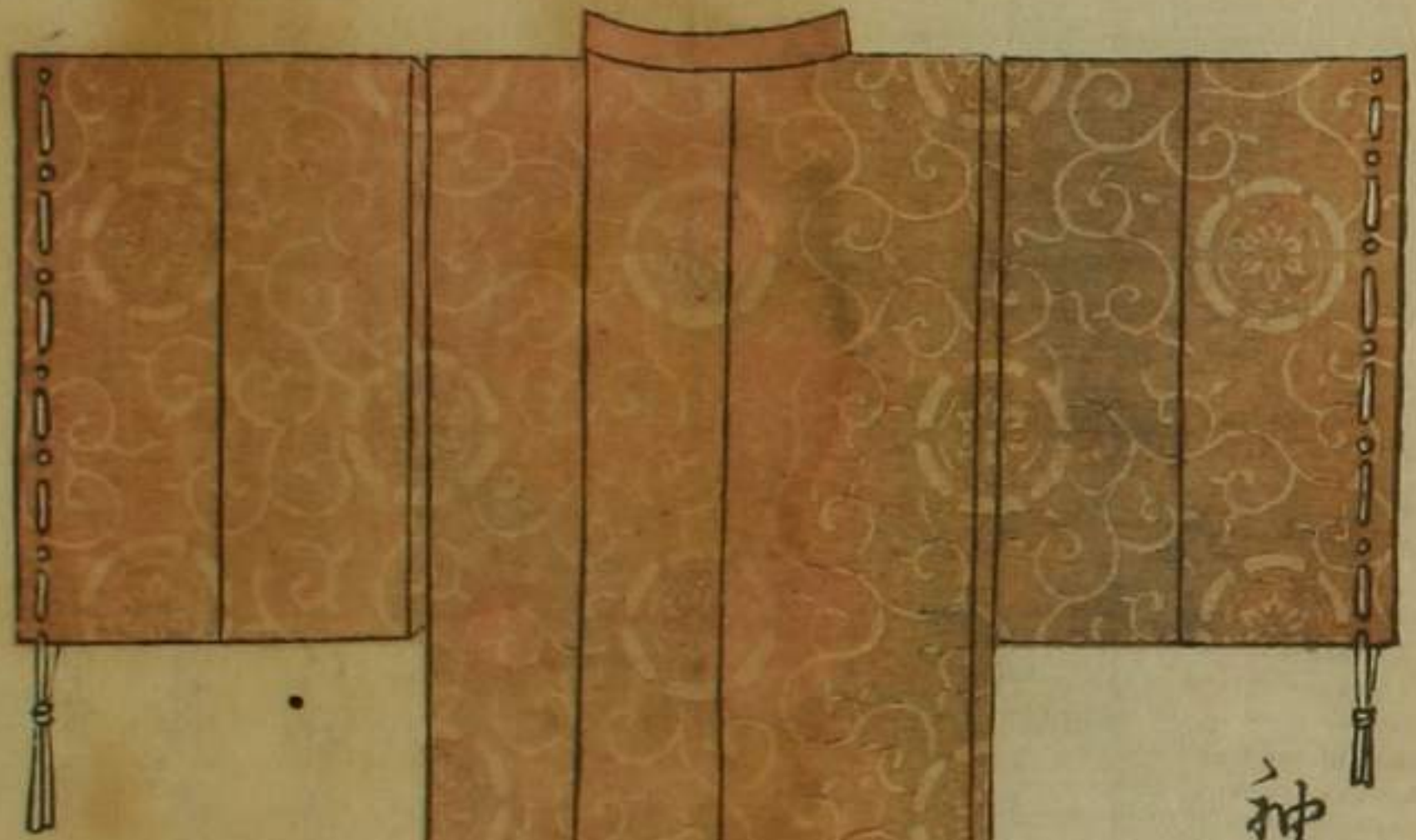


腰白精好文飾りぬき

古代ハナシヨクモ
ニメクヤをハル

持衣

文紗頭文紗
のいふまゝ家の
紋を織入又ハ
家の紋をいも
子細まりといハ
武家そハ家文
織入るといハ
こと
首かゝ袍の
後一幅ろり
袖ハ後そ又分
斗り下ハ斗り
ぬひけり

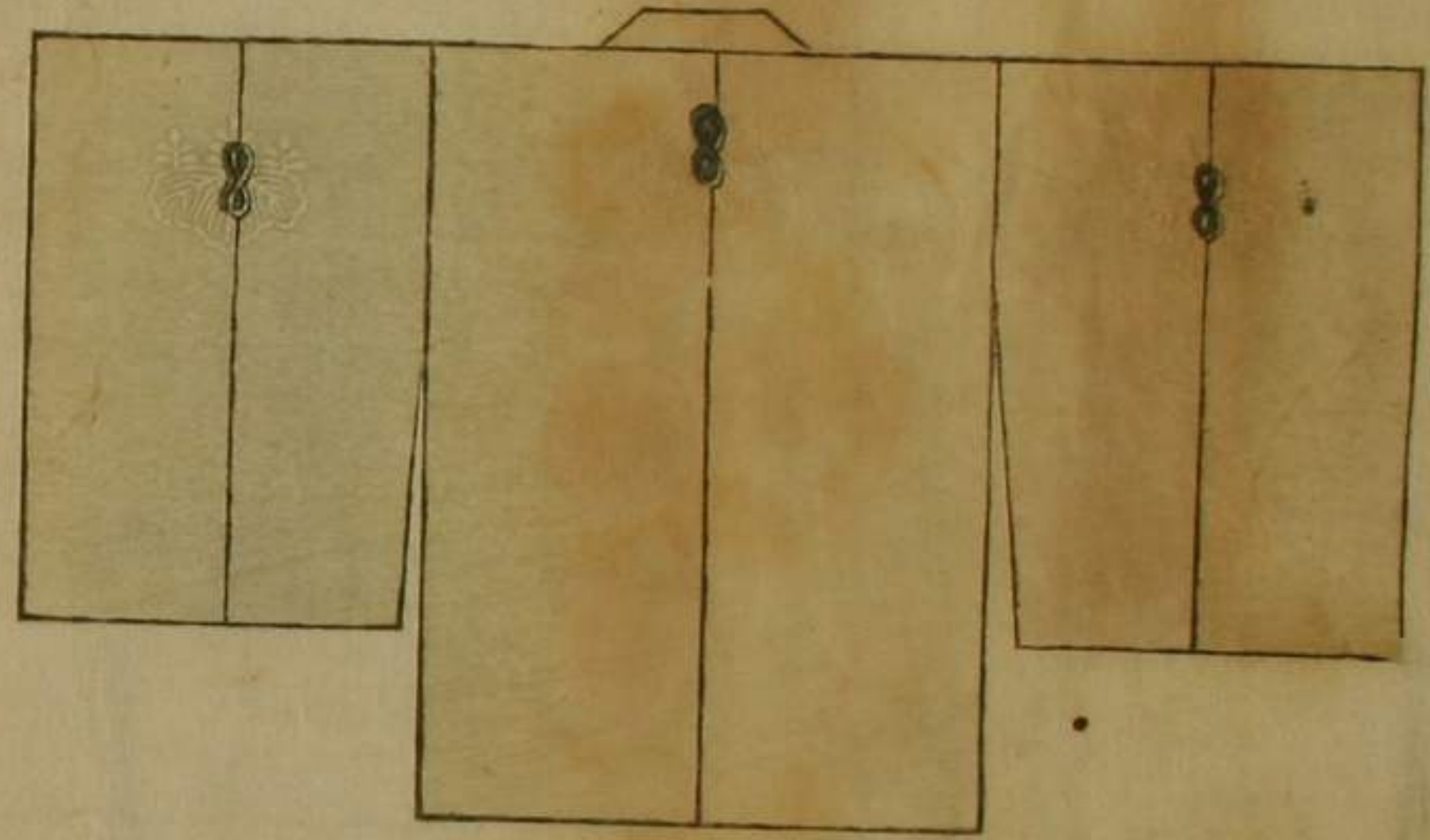


袖ろり
白より糸

兜帯同地又ハ下袴の
きれを用い子細
る

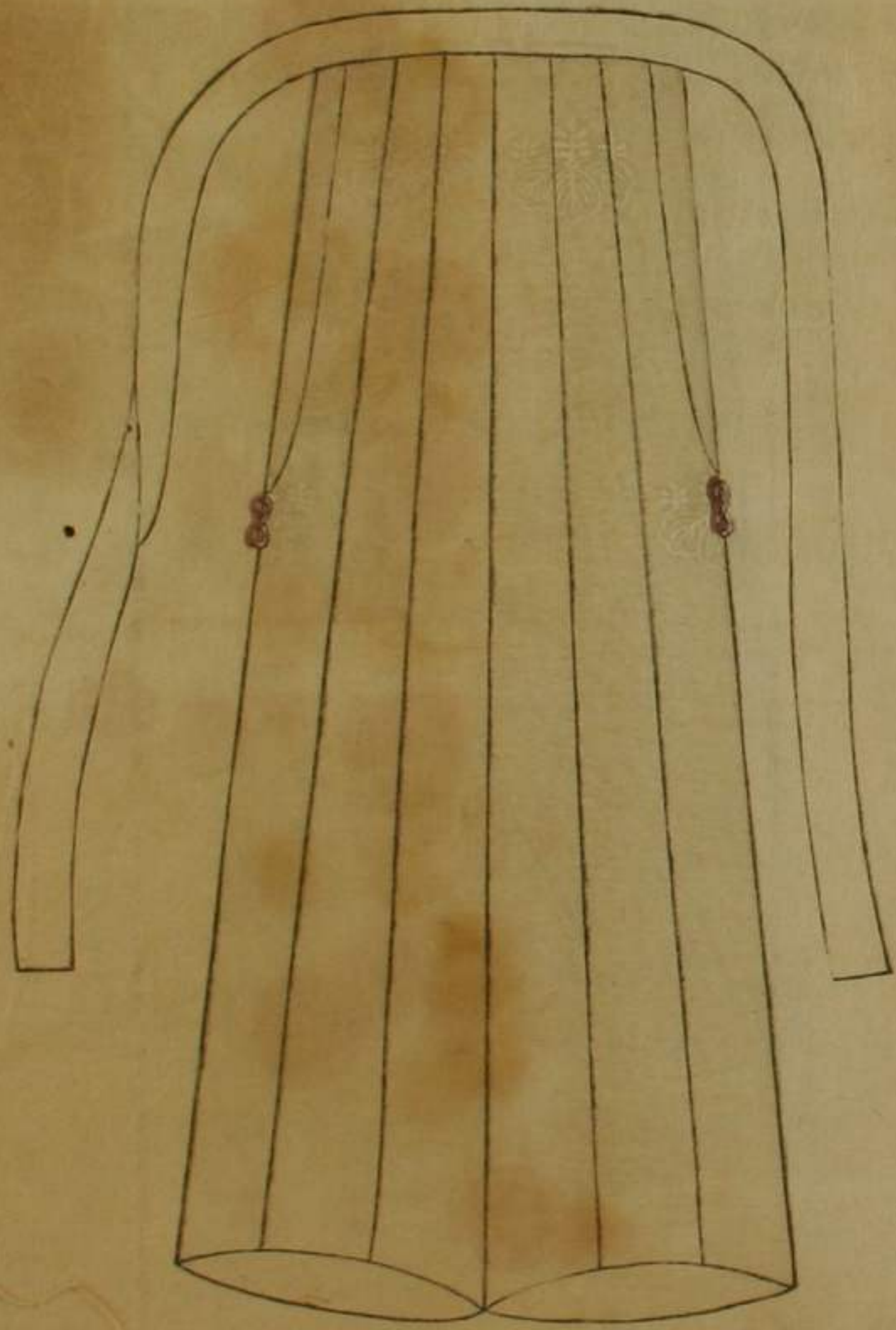
兜帯子下袴のきれを
用いハ横色糸を階成
ア分んといハ
白袴のときハ帯き方を
喜ハす也

同後之図



後襟の縫い方
 布の幅は
 是れに附して

同袴之図
 同地



腰精好又ハ練平縮を以用コ
 布は用ハ古布又ハ新

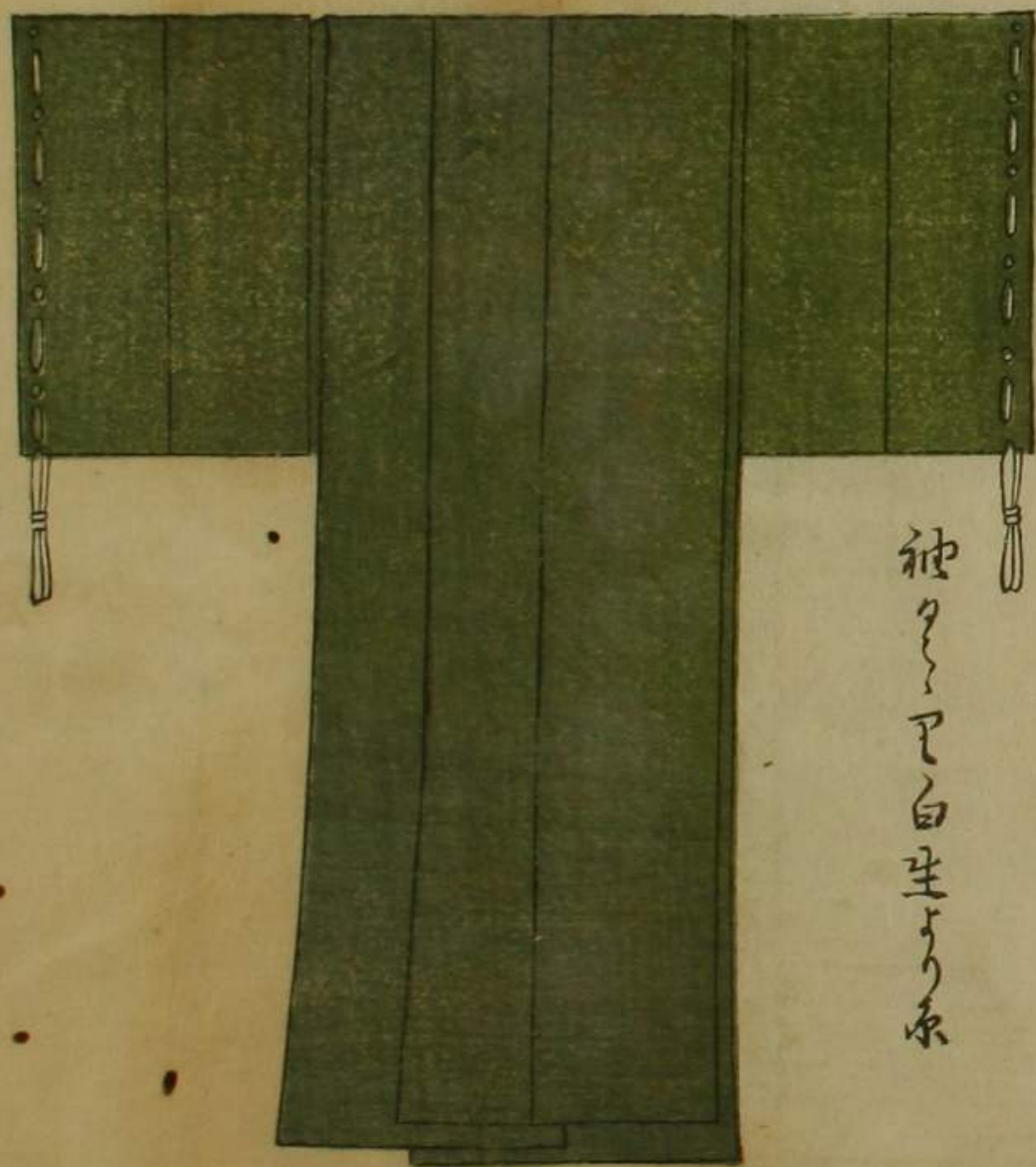
同後之図

紋所一ツ付と又ハ不付を云
付く方より一ツ付



布衣

色定まり
地師の好む
古代ハと氣の
多分さしを
用ひてても
近世市販地
師と練を
をりしあ
後幅指の
一



袖々一尺白生より糸

奴袴

地平繪淺黄漆色

古へハ上取の字治きしり
綿の巻き乃しり板歩用
よしり

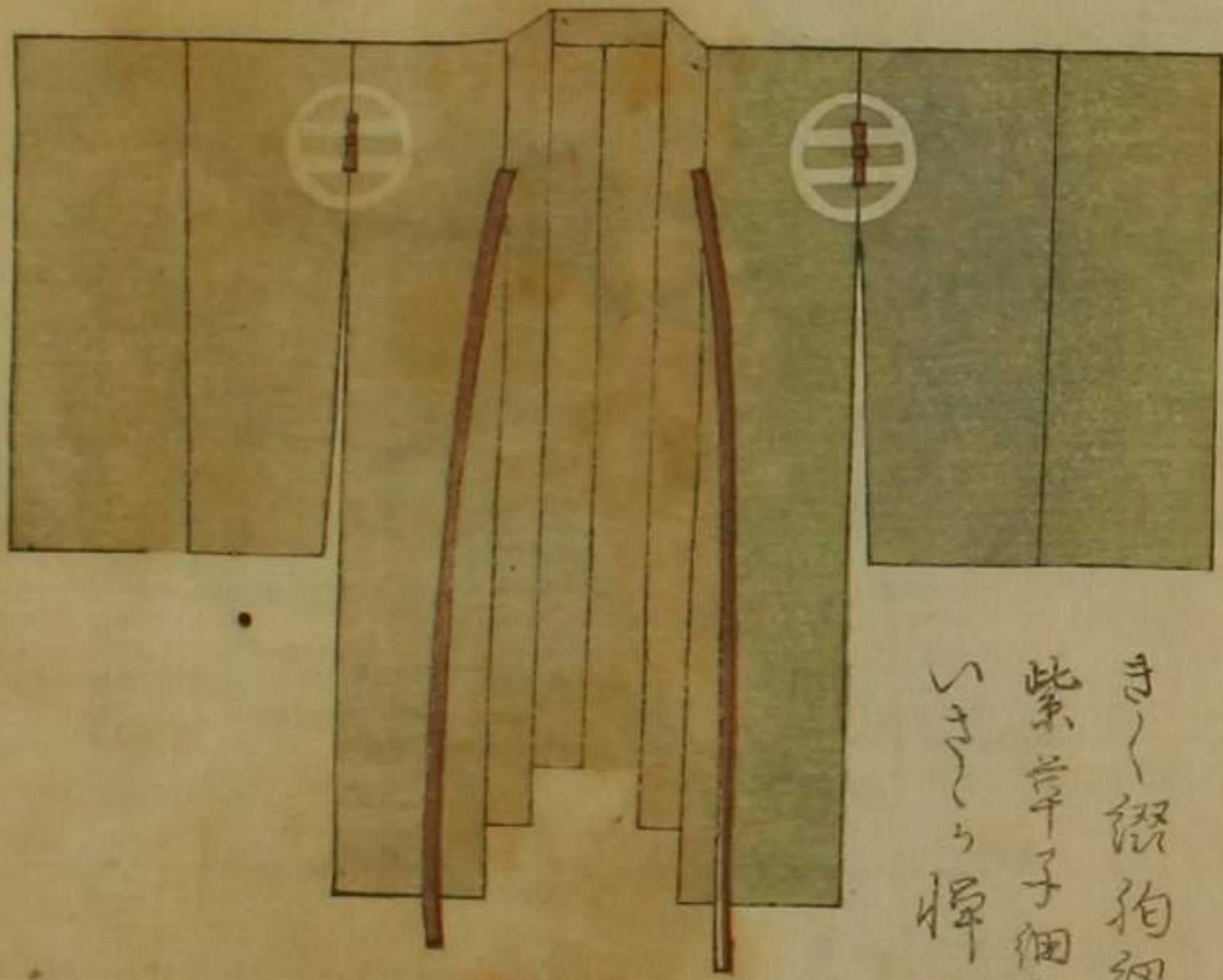


素袍

地布色不定

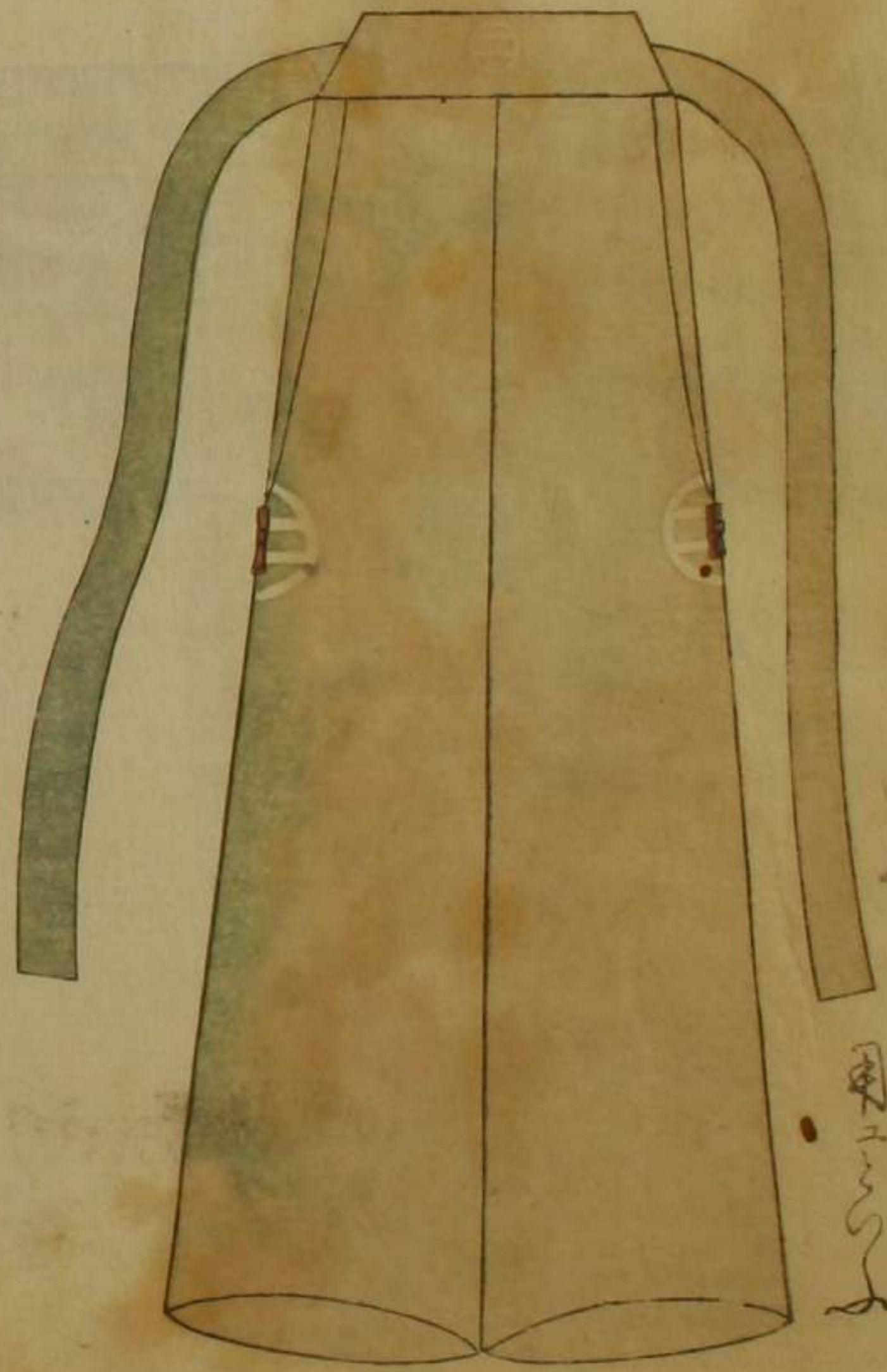
小素袍ハ袖一幅半其外替事
御宮衆の取小人騎馬の取
家の紋と色繪しり子細事

きり綴物綴草色
紫草子細事
いさしり揮



袴後之図

前ニ身おきの
紋ナ



ハハハ腰板ニ一幅ハ出ス

用ニスル

享和元年辛酉九月

筑後列久留米

松岡辰方門人

松波茂貞誌

足利家の以將軍家ハ精好の盛衰と云せられ後領公下
尊卑と云がしハ皆裏布又ハ単直密ハ大帷子と云を云す
いづきも布ハ紋ハ或ハ家の紋ハを付ケり公家方ハ之
諸大夫家の外領重ハと云せられ之も附近の前布重ハと
云ハりて之を世ハと云ハりて武者方ハ之指衣ハと云せられ之の
稀ハの義あり慶長元和の比信直直密四品物衣法ハ又
大紋布衣素襖ハの制と云られ又正徳の比諸大夫物衣と
云す之とゆるされ之ハ享保年中ハより四制ハに復せられ
又公家方ハ之小直衣傍ハつて之義亦物衣ハ長縮ハの
服制衣ハあれ武家方ハ用スる亦あれ之と云す

